

半径 1mから

CMEO 事業部 田村一雄

小学生の頃、学研の「学習」と「科学」をとっていた。これを書くために学研の HP をみてみたら、「学習」は 2009 年度冬号（2010 年 1 月 1 日発刊）、「科学」は 2009 年度 3 月号（2010 年 3 月 1 日発刊）で「児童数の減少やニーズの多様化等の市場環境の変化による部数の減少のため」休刊となったとある。「学習」は 1946 年（昭和 21 年）、「科学」は 1957 年（昭和 32 年）の創刊だったそうだ。私がこれらをとっていたのは 1968 年（昭和 43 年）頃から 1973 年（昭和 48 年）頃のはずなので、これらの雑誌の黄金期といっても過言ではない時代だったのではないか。出版業界（矢野経済も出版社なのです。所属する健保の関係では）の片隅に身を置く立場としてせつないものがある。

このことは本題ではないのだが、私は「科学」が好きだった。特に昆虫、森の動物、水辺の生物といった特集時の写真やイラストが大好きで食い入るように読んで、その場に自分がいるような夢をしたもんである。そう、私は自然が好きだった。

好きだったのだが、頻繁に森や海辺に出かけていったわけではない。頻繁ではないが、オヤジの田舎（埼玉県加須市）やオフクロの友達の家（埼玉県熊谷市）などに行ったときに近くの林でカブトムシやクワガタを採ったり、田んぼやあぜ道、農業用水路などでザリガニ、カエル、ドジョウ、コブナなどを見つけてははしゃいでいた。「科学」の写真やイラストに出てくるヤゴやゲンゴロウ、ミズカマキリなどもゲットしたかったのだが、それはかなわなかった。

大人になるにつれこれらの生き物に接触する機会はほとんどなくなったが、子供の関係（学童クラブの行事等）でキャンプや BBQ などに参加するようになると、この頃の感覚がよみがえってきた。千葉県天津の海岸の岩場にはカニやドカリがいたし、水泳の得意な当時小 6 くらいのムスメは水中メガネとシュノーケルでかなり深いところまで潜って熱帯魚に感動し、小さなウニを^{*1}密猟したものだ。ムスメは高校卒業後、オーストラリアに 1 年間滞在し、スキューバの世界ライセンスを取った。

私といえば、家から車で 15~20 分程度で行ける板橋区と埼玉県境の荒川で BBQ をやったときなど、小川ともいえないような幅 70~80 cm 程度の水路？で子供 5~6 人とザリガニ取りを競い、私が 40 匹近くゲットし初代ザリガニチャンピオンになったものだ。最初で最後のコンペティションだったので、初にして永久チャンピオンでもある。ゲットしたザリガニはうちに持って帰ってしばらく育てた。数ヶ月のうちにザリガニは共食いで激減し数匹が残った。ある日気付いたら水槽にボウフラのような生き物がウジャウジャわいていた。これらはザリガニの子供であった。私が荒川からゲットしてきたザリガニが代替わりしたのだ。この子供のうち、やはり数匹程度が大人になった。2 年半程度ザリガニ飼育を楽しむことができた（と言っても 2 代目が育つ頃には飽きていた）。

なお、荒川の川辺の土手を歩いてみると、土手の壁に穴がたくさん空いている。ここにはカニが生息している。デカイやつは15 cmくらいあるのではないか。種別は不明だが、こんなところにカニがいるとは知らなかった。

今は地味にメダカを飼っている。もう何年になるだろう。ザリガニと時を同じくして飼い始めたが一時中断し、1年程前にまた始めた。最初に飼ったメダカも1回代替わりした。

だが、私は犬・猫は苦手だ。特に犬はある程度の大きさのヤツは怖いといってもいい。前から犬がくると道の端っこを歩く。ガードレールがある場合はガードレールを越えて車道を歩く。最近、恐怖心が減った。その理由はよくわからないのだが、ひとつは仕事上お世話になった方のお宅におじゃましたときに飼われていた犬が非常に利口でルックスもよかったことがあげられるかもしれない（最初、吠えられて、まわりついてきてとても困った）。もうひとつは、私が大人になって犬に敵対心を持たなくなったことか。犬は人間の敵対心や恐怖心を見抜くという。あと何年かしたら座敷犬でも飼おうかな。

こんなヘタレだからアウトドアでクマやイノシシに遭遇したら私はパニックになるだろう。^{※2}タヌキやキツネ程度でも危ない。でも自分の身を安全な場に置いて動物を見るのは大好きだ。TVでもいい。私はNHKの「ダーウィンが来た！」とか今森光彦の里山シリーズの大ファン。BDにも撮りだめている。

動物園もいい。上野は何回も行ったし、多摩も行った。小規模だが井の頭公園内にある動物園も行った。旭山動物園もいつか行ってみたい。ここ何年も行ってないが、若い頃デートには何回も利用させてもらった。ある女がインド象の後にアフリカ象を見て言った。「なんかコレ違うよね。このゾウ、サイ？」私はぶっとんだ。この発言をした女はその後私のカミサンとなった。

実は、このYano E plus編集者の松永映美から、「このコラムをリニューアルしたい、●●市場を斬る！といったものはどうか」という要求を突きつけられた。一ヶ月に一度「市場を斬る」のはつらい。ただ、これまでの身の回りの出来事などから、もう少し社会的なテーマにしていこうかな、とは考えた。そこで身近な環境問題を語ろうとしたらこんな文章になってしまった。

何が言いたいかというと、政治、官僚、地方自治体、ゼネコン、学者など環境に良くないことをしてきたかもしれないカテゴリーに声を上げることも大事かもしれないが、まずは自分の手の届くことから一人一人が自覚を持ち小さなことから始めることが重要なんではないかと思うのだ。私の小学校時代の校長先生が言った言葉でいまだに覚えていることがある。「あなたがたがモノを買ったとする。それをポイ捨てる。あなたがたは捨てる権利まで買ったのか」と。たぶん、1973年頃の話である。まさにデポジットの考え方ではないか。

私はスモーカーだが、携帯灰皿を持ち歩く。使用済み容器、ビン、缶などの処理はその地域のルールに従う。粗大ゴミの処分のルールも厳守する。トイレの後は自分が汚そうが他人が汚そうが汚れていれば簡易に清掃する。社内でゴミが落ちていればできるだけ拾ってしかるべき場所に捨てる。ドアは静かに開閉する。

「割れ窓理論」という考え方がある。1枚の割れた窓を放置しておけば2枚、3枚と割られ、荒廃が地域全体へ広がる。割れ窓を放置しないことが凶悪犯罪の芽を摘むことにつながるという環境犯罪学上の理論で、アメリカの犯罪学者ジョージ・ケリングという人が考案した。ニューヨーク市が採用して凶悪犯罪の減少につながったという。ブローケン・ウィンドウ理論ともいう。詳細は Wikipedia や専門書などを参照していただきたい。

この理論は犯罪にとどまらず、拡大解釈すれば仕事上のモラル（morale）向上や環境問題などにも当てはめることができよう。

「風が吹けば桶屋が儲かる」的ではあるが、ちょっとしたきっかけが大きな問題を引き起こすことにつながる。氷山の下にはものすごい大きな塊がある。一人一人がちょっとしたきっかけをきっかけにしないように気をつけて行動していくことで世の中は一段と住みやすくなるのではないかな。

スモーカーは歩きタバコや吸殻のポイ捨てはやめよう。犬の飼い主はフンを持ち帰ろう。粗大ゴミを側道や山林に捨てるようなセコイまねはやめよう。使ったものは元の位置に戻そう。電車など公共の場でのルールは守ろう。

最近、新聞や業界紙で良く見かける東レ経営研究所特別顧問の佐々木常夫氏はライフワークバランスで有名だが、^{※3} 同氏は「幼稚園で習ったことができるだけでリーダーになれる」、それは「誰とでも仲良くする」「仲間外れをつくらない」「悪いことをしたら謝る」「困っている人がいれば助ける」ことだという。

環境問題だって同じだ。幼稚園で習った程度の常識と自分のほんの半径 1m 程度の範囲のことから気をつけていけば、きっと良くなっていくと思いたい。

2011 年、年初に当たってこんなことを考えました。今年もよろしく願いいたします。

[筆者注]

- ※ 1 天津漁協（といった団体があれば、またはそれに類する団体）様、ごめんなさい。
- ※ 2 何年か前にうち（板橋区）の近所でタヌキを見た。朝方暗い時間帯でどうみても犬でもないし猫でもなかった。NHK「ダーウィンが来た！」によると、タヌキは東京全域に生息していて、特に都会のタヌキは電車の線路の沿線をねぐらにしているらしい
- ※ 3 週間東洋経済 2010.6.26 より

執筆者略歴：田村一雄

1989 年、(株)矢野経済研究所入社。以来、化学・素材分野の調査研究に従事。現在はデバイスまで調査領域を広げ CMEO 事業部長としてエレクトロニクス分野の川上から川下領域を統括。知的クラスターへのコンサルティング実績を有する他、台北事務所所長、ソウル支社長を兼務。